

idea

ニュースレター「アイデア」

2024.5

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、「アイデア」と「であい」の機会を創ります。

- 1 | 二言三言 | 一関市教育委員会 学校教育課 (後編)
- 3 | 団体紹介 | NPO法人奏楽のたね
- 5 | 地域紹介 | 油島第9区集落 (花泉)
- 7 | 企業紹介 | 朝日堂製菓 (室根)
- 8 | 博識社のフクロウ博士 | 地域運営の落とし穴⑥ 地域協働体はRMOなの？
- 9 | センターの自由研究 | くらし調査ファイルNo.25 「照井堰用水」



今月の表紙

水路をできるだけ短い距離で通水するために山に穴を開けた水路トンネルを「隧道(ずいどう)」と呼び、照井土地改良区が管理している隧道は15か所。その中で、現存する最古の素堀隧道が「樋の沢隧道」で、平泉町平泉字樋ノ沢地内にあります。隧道内部は高さ約120cm。鑿(たがね)等で掘った形跡も確認することができます。(自由研究)

idea 発行 いちのせき市民活動センター せんまやサテライト 〒021-0881 一関市大町4-29 なのはなプラザ4F Tel 0191-26-6400 Fax 0191-26-6415 ホームページ: https://www.center-i.org/ メール: center-i@tempo.on.ne.jp 〒029-0803 一関市千厩町千厩字町149 Tel 0191-48-3735 Fax 0191-48-3736

お知らせ

<p>募集 ◆ NPO法人奏楽のたね 会員募集中</p> <p>本誌「団体紹介」で紹介した「NPO法人奏楽のたね」では、会員を募集しています。年齢、性別、居住地は不問で、法人の「重症心身障がい児・者の理解促進及び啓発活動を行いながら支援の輪を広げていく」という活動目的に賛同した個人・団体であれば誰でも入会可能です。</p> <p>法人の活動等についてはHPでも情報を発信しているので、右記QRコードを読み込むか、下記までお問合せください。</p>  <p>年会費: (正会員) 2,000円 ※個人、団体とも (賛助会員) 1,000円/1口(個人) 5,000円/1口(団体)</p> <p>問合せ: 0191-34-4243 (NPO法人奏楽のたね)</p>	<p>イベント ◆ 「ふじさわ朝市2024」 12月まで開催</p> <p>「ふじさわ朝市の会」が主催する「ふじさわ朝市2024」を下記日程で開催します。「つなげる・つながる・楽しむ」がテーマの朝市で、生産者こだわりの商品が集結！季節に応じた野菜や果物、コーヒー、パン等のほか、雑貨の販売もあります。出店者も随時募集中。詳しくは下記まで。</p> <p>開催日時: 2024年4月～12月 第1日曜日 9時～12時 ※今後の開催日は5月5日、6月2日、7月7日、8月4日、9月1日、10月6日、11月3日、12月1日</p> <p>場所: 神文ストア藤沢店 第3駐車場 (一関市藤沢町藤沢字早道80-1)</p> <p>販売品目: 農産物、果物、加工品、花卉類、魚介類、手芸用品、特産品 等</p> <p>問合せ: 0191-63-5588 (事務局・伊東)</p>	<p>イベント ◆ 東北舞踏 三角標 第8回定期公演 「3.5次元」</p> <p>一関市を拠点に、「舞踏を通じて自由な命を取り戻していく」ことを掲げて活動する「三角標(みがかし)」は、下記日程で第8回定期公演を開催します。公演は「3.5次元」をタイトルに、非日常の世界観を舞踏で表現するほか、同日10時からは「投げ銭#舞踏ワークショップ(要申込)」も開催します。詳しくは下記まで。</p> <p>開催日: 2024年6月9日(日) 公演時間: (第一部)14時開演(13時30分開場) (第二部)18時開演(17時30分開場)</p> <p>場所: 千厩酒のくら交流施設 新蔵 (一関市千厩町千厩字北方134)</p> <p>料金: 投げ銭制 問合せ: 070-5326-8118(岩淵)</p>
<p>情報 ◆ 照井土地改良区 施設見学/出前授業</p> <p>「照井堰」の管理や修繕、土地改良事業等を行う照井土地改良区(水土里ネットてい)では、水利施設の見学会や照井堰の歴史や仕組みなどを解説する出前授業を実施しています(施設見学と出前授業の組み合わせも可)。小学校や地域のサロン、市民センターなどの事業としても活用いただけます。詳しくは下記までお問合せください。</p> <p>内容: ・堰の歴史や仕組み(開削に使用した道具の紹介等) ・大メ切頭首工や八幡沢発電所の見学 など ※内容や時間は調整可能</p> <p>料金: 無料 問合せ: 0191-23-2135 (照井土地改良区・出前授業担当)</p>	<p>募集 ◆ 「一関市民の新しい踊り」 名称募集中</p> <p>「一関の新しい踊りを創作する会」では、令和元年から一関市の統一した踊りの作成に取り組んでおり、踊りの基本形が完成したため、その名称を募集中です。詳しくは右記QRコードを読み込むか、下記までお問合せください。</p>  <p>募集内容: 「一関市民の新しい踊り」の名称(一人3点まで応募可) 表彰: グランプリ 1点(賞状と副賞) 特別賞 3点(賞状と副賞) 締切: 2024年5月15日(水) 問合せ: 0191-23-3434 (事務局(一関商工会議所内))</p>	<p>募集 ◆ いちのせき市民フェスタ24 参加団体募集</p> <p>一関市内で活動を行う市民活動団体を中心に、個人・企業等が一堂に会し、活動紹介をはじめ、各種体験等により交流を図りながら、市民のまちづくりへの参画を促進する「いちのせき市民フェスタ」。このイベントに参加する団体を募集します(約50団体を想定/市民活動団体優先)。</p> <p>詳しくは右記QRコードを読み込むか、下記まで。</p>  <p>開催日: 2024年8月25日(日) 会場: 千厩農村環境改善センター/千厩アイスアリーナ 募集締切: 2024年5月27日(月) 問合せ: 0191-26-6400 (いちのせき市民活動センター)</p>

まちの写真展 スタッフがまちの1コマを切り取ります。

作品名 「『たてる会』も奉納した金精様」



油島宇飛ヶ沢にある道祖神社に奉納されている大小様々な男根を模った御神体。ひととき大きなものは、本誌「地域紹介」掲載の油島第9区集落内「たてる会」が奉納しました。同神社は古くから、疫病退散、夫婦円満、子孫繁栄など、様々な参拝客が訪れています。



旧町村別の人口動態等を共有します。

	人口	前月比	世帯数	前月比
一関	53475	-328	24553	-30
花泉	11729	-47	4683	6
川崎	3203	13	1269	0
千厩	9590	-63	4081	6
大東	11646	-46	4883	10
東山	5752	-30	2271	3
室根	4287	-31	1790	-4
藤沢	6933	-38	2772	0
一関市全体	人口 106615	-570	世帯数 46302	-9
	出生数 29	3		

2024年4月1日付 (2024年3月31日現在 住民基本台帳より) ※外国人登録者含む

178 / 106,615

一関市教育委員会 学校教育課

一関市教育委員会は、地域の公共事務のうち教育に関する事務を管理、執行する機関で、教育長及び4人の委員により組織される。その権限に属する事務を処理させるため、事務局を置いている。現行の「一関市教育振興基本計画」における基本目標は「学びの風土を礎に 心豊かにたくましく 郷土の誇りを未来につなぐ 一関の人づくり」。



「全日型」の地域部活動として活動する千厩中学校柔道部。指導者5人、中学生4人のほか、小学生や未就学児も一緒に練習しており、高校生が参加することも。

第117回

一関市教育委員会 学校教育課

いちのせき市民活動センターセンター長 小野寺浩樹

「学校」と「地域」の「これから」 ～コミュニティ・スクールと地域部活動【後編】～

文部科学省では、休日の部活動について、地域の実情等に依じて可能な限り早期に「地域と連携(合同部活動や部活動指導員の配置、学校外の地域団体が主体となる地域クラブ活動へ移行)」するよう、各自治体に求めています。前号の「コミュニティ・スクール」に続き、移行の推進を担う一関市教育委員会・学校教育課に、その意味合いや、当市の実情・課題等を伺いました(2回シリーズの後編)。

小野寺 「地域部活動」については、保護者世代から「大変だ」という声をよく聞きます。まずは何がどう変わっていくものなのか、教えてください。

学校教育課 これまでの部活動(学校部活動)は、学校を主体とし、教員が顧問として担当の部を見ていましたが、「地域部活動」では、学校部活動に準ずる団体として登録申請し、一関市教育委員会が承認した民間団体が主体となって活動を行います。

小野寺 「全日型」と「全日型」の2形態を設け、最終的には「全日型」へ移行する方針ですが、令和8年度には市立中学校の学校部活動を「休日型」に移行することを目指しています。

小野寺 「休日型」と「全日型」の違いは何ですか？

学校教育課 「休日型」は、平日の勤務時間内は「学校部活動」として教員(顧問)が指導し、

学校教育課 「休日型」の場合は学校に部活動が残っているもので、学校で用意することもできますが、「全日型」の場合、学校からは切り離しているため、各団体で用意することになります。そのため、当市では独自で補助制度も設置しました。

小野寺 市費投入はありますか？

学校教育課 そうなる団体も出てくるのが予想されます。なお、令和4年度まで当市では中学校の部活動は全員加入を原則にしていましたが、令和5年度から「加入推奨制」にしたんです。その結果、令和5年度は約1割の生徒が部活動に未加入となっています。

小野寺 部活動に負担を感じる生徒や、部活動以外のことに注力したい生徒にとっては選択肢の負担が増える現状においては、「加入推奨」になったことで、部活動をしたくても、親からス

土曜日等の休日は「地域部活動」として民間団体が主体となって活動します。学校に部活動は残した状態で、教員の勤務時間外は地域で、というものです。「全日型」は、学校には部活動がない状態で、平日の教員の勤務時間内も含めて民間団体が主体となって活動します。

小野寺 今現在、平日の17時以降は保護者が見守りをしているという話をよく聞きますが、それと「休日型」は別ですか？

学校教育課 はい。学校主体の部活動は、勤務時間終了後は教員の対応外としており、それ以降に活動するには、保護者会(育成会)を組織し、「保護者会練習」という位置づけにします。保護者会と地域部活動の組織とは、要件が異なります。

小野寺 地域部活動に移行しなくても、すでに保護者の関わりは大きくなっているんですね。そもそも、地域部活動への移

学校教育課 そういう側面もあるかもしれませんが、多岐に渡る問題が付随しているため、一様には解決できないというのは、推進しながら感じているところ

小野寺 地域側も、得意なスポーツ等で指導や運営に関わることを、一つの「地域づくりへの参加」と捉え、人の把握や参加促進をしていくべきですね。

小野寺 少ない子どもたちのための環境を、どのように作っていくのか、ということであり、大事なはその仕組みづくりです。

行にはどのような背景があるんですか？

学校教育課 少子化で様々な部活が成り立たなくなってきたおり、運動・文化活動ともに子どもたちの「活動の場」の保障をしていきたいというのが一つ。もう一つは働き方改革の流れで、先生方の勤務時間の適正化を図りつつ、子どもたちの「活動の場」を保障しようとしたときに、学校の先生だけでは対応できないため、「地域部活動」という流れになったという背景です。

小野寺 保護者会練習の流れがあるからか、働き方改革による影響だと解釈されがちですが、学校の規模が小さくなり、団体種目に取り組めない現状で、野球やサッカー、バスケットやバレーなどにも取り組める環境を整えてあげようというものが根本にあるということですね。

学校教育課 実際、令和5年度のソフトボール新人戦は、3チーム出場し、内2チームは合同チームでした。合同チームも1チームに4つの中学校が集まる状況でしたが、所属した生徒は活動することができました。

小野寺 様々な種目で合同チームが増えているのは聞きますが、地域部活動とは別ですよ？

学校教育課 学校主体の合同チームであり、地域部活動とは異なります。中総体や新人戦等、中体連の大会は学校単位が基本であり、大会参加を目標にするので、学校主体の合同チームにならざるを得なかったんです。令和5年度から、種目によって民間クラブの参加も可能となったものの、登録の要件を整えるのが難しいという実態があります。

小野寺 スポーツ団体を作った地域部活動に移行したとしても中体連の大会に出場できないとなると、辛いですよね。

学校教育課 地域部活動の受け皿となる民間クラブやスポーツ少年団はあるんですが、地域部活動に踏み切れない要因の一つに中総体の出場資格があるよう

小野寺 ちなみに地域部活動に移行すると、活動に必要となる備品や会場など、それまで学校が担っていた部分はどうなるんでしょうか？

※2 複数の条件があり、「中体連主催大会の参加を認める条件」の中には「活動にあたっては日常継続的に公益財団法人日本スポーツ協会等公認スポーツ指導者資格を有する代表者もしくは指導者の指導のもとに、適切に行われていること」など、代表者や指導者が資格を有している必要がある。
※3 「地域部活動運営費補助」。全日型は上限100,000円/年(基本額50,000円+5,000円×人数)、休日型は上限50,000円/年(基本額20,000円+3,000円×人数)

※1 令和5年度の移行数(市内)は、全日型が3団体(千厩中学校:柔道男女、東山中学校:卓球男女・バスケットボール女子)、休日型が15団体(磐井中学校:卓球男子・卓球女子・柔道男女、桜町中学校:卓球男女・吹奏楽、厳美中学校:野球・バレーボール女子・ソフトテニス女子・卓球男女、舞川中学校:バドミントン女子、花泉中学校:ソフトボール・バレーボール男女、東山中学校:サッカー男女・バドミントン男女、藤沢中学校:ソフトテニス男女)。

団体紹介

人と人の繋がりがから、生まれ、育てていく

NPO法人奏楽のたね
 令和4年11月設立。重症心身障がい児・者への支援と理解促進等を目的に、「ヘルパーステーション奏楽のたね」「放課後等デイサービスそらのわ」を開所し、障がい福祉サービスを提供する。現在の正会員は11名、各種サービス利用者の登録数は19名。
 住所：一関市萩荘境ノ神237-1
 TEL：0191-34-4243 FAX：0191-34-4244
 HP：https://soranothane.jp/



左の写真：放課後等デイサービス「そらのわ」事業所スタッフと利用者(令和6年4月)

幅広い障がい福祉サービスを提供

令和4年11月、「市内在住の重症心身障がい児・者本人及びその家族等に対して、理解を深め、デイサービス事業や訪問事業、相談支援活動に関する事業を行い、地域や関係施設・団体等において、理解の促進及び啓発活動を行いながら支援の輪を広げ、重症児等の福祉の推進に寄与すること」を目的に「NPO法人奏楽のたね」が設立されました。

同法人は、令和5年5月に「ヘルパーステーション奏楽のたね」を開所し、居宅介護、重度訪問介護、移動支援のサービスの提供を行っています。令和6年3月からは1歳から64歳までを対象とした「日中一時支援」の提供も開始し、保護者のレスパイト(介護負担の軽減)を目指しています。

また、同年4月には、小学生から高校生までの放課後の居場所づくりや社会との交流促進などにつなげようと「放課後等デイサービス

そら NPO法人奏楽のたね

娘の存在がきっかけに

法人設立のきっかけを代表理事の伊藤和美さんに伺うと、「娘の存在が大きかった」と言います。

法人名の「奏楽」は伊藤さんの長女の名前です。生後間もなくして難治性てんかんウエスト症候群と診断され、「医療的ケア」を必要とする生活が余儀なくされた奏楽ちゃんも、令和3年10月に4歳という幼さでこの世を去りました。「急に日常生活が変わり、娘のケアに関わってくれた人たちの交流もなくなり、大きな孤独を感じた」という伊藤さん。同時に「娘との生活の中で、医療的ケア

スそらのわ」を開所。旧萩荘幼稚園を活用(賃貸)しています。

※1 重度の肢体不自由と重度の知的障がいとが重複した状態。
 ※2 自宅で入浴、排せつ、食事の介助等を行う。
 ※3 重度の肢体不自由者又は重度の知的障がい若しくは精神障がいにより行動上著しい困難を有する者であつて常に介護を必要とする人に、自宅で入浴、排せつ、食事の介護、外出時における移動支援等を総合的に行う。
 ※4 屋外での移動が困難な障がい者等について、外出のための支援を行う。

児の認知度や支援先が少ないことを痛感していたので、自分にも何かできないかという想いが芽生えた」のどとか。「娘の入院先で同室だったお母さん(※6)の知人だった縁で、同会とつながったり、『ミュージック・ケア』の活動などにも参加しました。娘とともにそうした交流を経験していたことから、医療的ケアを必要とする人、障がいのある人とその家族のことを知ってほしい。そして、頑張っているお母さんたちを支援したいという想いが、娘が亡くなったことで膨らんできたんです」と言う伊藤さんは、令和4年6月に賛同者を集め、必要な支援の在り方を考え始める。同年8月から法人立ち上げのための会議を重ね、10月の奏楽ちゃんの命日に合わせて設立認証申請書を提出。11月22日、法人設立を果たしました。

※5 自宅で家族等が日常的に行う、医療的生活援助行為のこと。
 ※6 一関市を拠点に重度障がい児・者の地域生活を豊かにするために活動している団体。
 ※7 音楽を使って、心と体の発達を促進、コミュニケーション力の促進等、子どものあらゆる発達を伸ばす療法のこと。

「家族」にも寄り添って

「福祉関係の情報は、受け身ではな

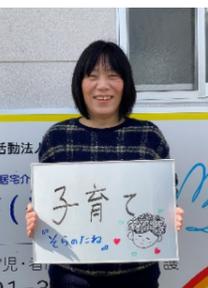
かなか入ってこないんです。私のようにネットワーク(交流)を積極的に広げたいというタイプの親は、親同士のネットワークで、様々な制度や施設などの情報を得ることができませんが、横のつながりが薄いと、得られる情報は限られてきます。でも、横のつながりを望まない親御さんの気持ちもわかるので、そういう方にはそっと寄り添い、助けを求められた時に助けてあげられるような法人でありたいんです」と伊藤さん。少しでも情報が届くように、ホームページやSNSなどを活用するほか、障がい児・者を支援する団体等のイベント運営の協力・参加などを行い、周知に力を入れています。

立ち上げたばかりの同法人ですが、事業に関わるスタッフは、介護福祉士、保育士、看護師、臨床発達心理士等の資格を持つ方や障がい者支援に関わっていた方など、経験豊富な人材が揃っており、「これも千葉淑子さんから『こんな人いるよ』と紹介していただいたおかげです。改めて『奏楽のたね』はいろんな人の力を借りて育っているんだと感じました」と伊藤さんは笑顔で話します。

「子どもたちの日々のケアで『自分の時間』を諦めてしまうお母さん方に、『自分の時間を大切にしてほしい』と

Q.あなたにとって「奏楽のたね」とは？

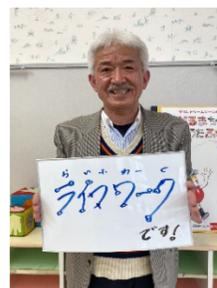
代表理事



A. 子育て

いとう かずみ
伊藤 和美さん
 前職の介護・福祉サービスの経験を活かし、現場に出ることも。初めての法人運営に悩みながらも笑顔は絶やしません。

副代表理事



A. ライフワークです！

おの ひろし
小野寺 浩さん
 教員時代の経験をきっかけに、障がい福祉を学びました。臨床発達心理士、児童発達支援管理責任者等の資格を保有しています。

呼び掛けていきたい」という同法人は、重症心身障がいや医療的ケア、そしてその家族支援についての理解促進も図り、「みんなで育てていく法人」として、必要な人に必要なサービスが届けられるよう、努めていきます。

- Photo gallery -



「そらのわ」スタッフ会議の様子。安全安心はもちろん、子どもたちが楽しく過ごすためのサービスを真剣に考えます。



ヘルパーさんと一緒に重度訪問介護の利用者と一緒に本を読む様子。利用者の体調や生活環境等に合わせたサービス提供を行っています。



イベント運営にも協力NPO法人心魂プロジェクトによるミュージカル(NPO法人くるりん主催)で、親たちも楽しめるようにヘルパーを派遣。



法人ロゴに込めた想いがサワラユウダイさんがデザインしたロゴ。「ソラ(奏楽)」の響きから音符を見立てて花を咲かせるという意味が。

油島第9区集落(油島)

夏川を挟んで宮城県登米市と面する中山間集落で、行政区は油島5-1区。花欠・飛ヶ沢・上原田・中原田・下原田・愛宕前・日向平の7小字のエリア(中原田・愛宕前は住居無し)で、35戸約100人が暮らす(6班体制)。旧蝦島村のエリアで、飛ヶ沢には道祖神社、蝦島館(西館)、日向平には鹿島神社がある。

左の写真：令和5年度「油島地区民大運動会」に「油島第9区集落公民館」として参加。中学生も活躍。



楽しみなながら、集落を「たてる」

起こす、尊敬する、評判をたてる……

40戸にも満たない小さな集落で、45年にも渡り集落の活気づくりに貢献し続ける団体があります。その名も「たてる会」。昭和54年4月、青年会のような位置づけで発足し、次第に長男会や家督会のような役割に発展、メンバーの世代交代も経ながら、現在は集落内の40代〜70代という幅広い年代の14人で活動しています。

油島第9区集落には集落公民館としての活動や、5・1行政区としての活動、その他中山間組織等による活動など、様々な活動があります。集落内の交流・振興を担うのが「たてる会」です。有志の集まりであり、月々の会費のほか、様々な作業で資金を「稼ぐ」ことで活動してきました。松くい虫防除作業を受託し、貯めたお金でグアム旅行に行ったこともあるというので驚きです。

「まずは集落を盛り上げること。集落の活動に出てこなければ、地

油島第9区集落

花泉

会の趣旨は「可能なことはすべて挑戦しよう」

結婚祝賀会や社交ダンス講習会、海水浴などの会員同士の交流の機会はもちろん、部落盆踊り大会、演芸大会、年祝い・成人祝い等、集落全体に向けての事業も多数行ってきた「たてる会」。集落内の神社に手作りの御神体や鳥居を奉納したこともあります。

令和5年度には一関市の地域おこし事業に申請し、7月に「納涼夏祭り大会」、11月に「光と遊ぶイルミネーションフェスタ」と、2事業を企画運営。集落内の老若男女が集い、交流を楽しみました。イルミネーションは県道沿いに同会が植樹を続けてきたサクラに設置。その距離約200mに渡り

のようにも見えますが、「たてる会」が人材の把握・育成を担ってきたことで、多くの家督たちが偏りなく各種役職を経験しており、横のつながりの中で縦の事業が動いています。県道沿いを彩るサクラは、その関係性の象徴とも言えるでしょう。

「課題」を「プラス」に変えて

ですが、よりボリューム感を増していくために、集落民に空き缶回収を呼びかけ、イルミネーション購入資金を調達する計画です(空き缶回収BOXは令和6年3月末に設置し、回収開始)。

23歳頃から同会に参加している武田健さんは、「自分が小学生の頃、すでに活動していた『たてる会』が、小学生ながらに楽しそうに見えた。この会でつながっているからこそ、20歳近く離れた先輩たちとも気さくに会話できる」と、集落における同会の存在を語ります。

同集落には県道183号(若柳花泉線)が走っており、かつては業者による草刈り作業が行われていたものの、作業されずに草が生い茂った年がありました。不思議に思った区長の川島登さんが県に問い合わせると、業者不足等の理由でできなくなっていたことが判明。集落で取り組むことを提案されたため、集落内で伺いを立てたところ、反対意見はなく、「まずはやってみよう」ということに。平成30年、受託を開始し、その後、年2回の作業をこなしてきました。

作業には男女問わず毎回30人以上が参加。旗や看板を持つ役など、女性にも可能な役割があるため、「みんなの力で稼いでいると実感できる」と川島さん。草刈り機等の燃料代も各自が負担し、受託費は全て5・1区として積み立てていますが、参加者からの異議はなく、「みんなの楽しみ」としての活用のほか、集落公民館の修繕費用などにも寄付する予定なのだとか。

参加者への飲み物代などは「当該県道沿いに立地する企業(株ヨシムラ)からのご祝儀を活用させていただいています」と嬉しそうに話す川島さん。以前は、集落内に立地しながらも、集落と本社との接点はなく、騒音や大型トラックの頻繁な通行に対し、住民から不満の声が出た時期もあったのだとか。そこで区長の川島さんが同社への会社見学の機会を調整。集落住民が同社の事業に理解を深めたことで、不満の声も少なくなりました。それどころか、草刈り作業時のご祝儀のほか、総会時に同社系列店のお弁当を差し入れてくれるなど、「お互い様」の関係に発展したのです。

集落を盛り上げる「たてる会」、対外的な事業を担う行政区、市民センターや地域協働体などの事業への住民参加を呼び掛ける集落公民館、縦割り

Q.集落の自慢は何ですか？

区長



かわしま のぼる
川島 登さん

4期8年目。民謡・歌謡曲で数々の受賞歴があり、近年は趣味の能面・神楽面制作に没頭中。もちろん「たてる会」OBです。

A. 活力のある楽しい集落

「たてる会」メンバー



たけだ けん
武田 健さん

50代前半にして「たてる会」歴30年以上の武田さん。先輩たちからも「頼めばすぐに動いてくれる」と、同会の何でも屋的存在です。

A. 笑顔が満ちあふれている九区集落!!

- Photo

gallery -



毎週草刈りですが……
県道以外にも、河川・道路愛護、中山間、多面的……と、草刈りシーズンは毎週末が草刈り。それでもみんな協力的です。



興奮のマジックショー
納涼夏祭り大会にはプロマジシャンが登場！老若男女が間近で見るマジックショーに大興奮。屋台や花火も楽しみました。



春はライトアップ
「たてる会」によるイルミネーション撤去作業の様子。サクラの開花時はライトアップに切り替えるため、その準備も……。



「たてる会」総会にて
かつては1泊で総会をしていた同会。近年は日帰りで、令和6年度総会は「金成延年閣」にて開催しました(欠席1名)。

室根 朝日堂製菓

「つりがね最中」や「お菓子とうふ」などの和菓子を中心に製造販売を行う朝日堂製菓は、大正13年頃、宮城県仙台市で修業を積んだ現店主の祖父(初代)が、和菓子とパンの製造販売業として気仙沼市で創業。昭和34年頃に2代目(父)が室根村(当時)に店舗を移転し和菓子製造販売の継承を行うも、火事で被災し、苦渋の判断で菓子製造を断念、「朝日堂製菓」の名を残したまま菓子卸業に転換。3代目の大房厚治さん(現店主)が卸業の傍らに現住所で和菓子製造販売の店舗を構え(平成7年)、2代目とともに地元銘菓を発案・製造。全国菓子大博覧会(主催：全国菓子工業組合連合会等)で数々の入賞を果たしました。

再び和菓子製造の店として、新たな銘菓づくりへ

技術職から菓子職人への転身

初代が気仙沼市に店を構えてから創業約100年となる「朝日堂製菓」。2代目が菓子製造から菓子卸業へと業種転換するも、「朝日堂製菓」の名と「和菓子作りの技術」は、その灯を消すことなく受け継がれてきました。

現店主(3代目)の大房厚治さんは、もともと手先が器用で、電気機器関係の仕事に憧れ、大手IT企業に就職しましたが、26歳の時に両親の体調面等を考慮し事業を継ぐため退職。以後、菓子卸業を手伝う傍ら、祖父から父に継承されていた和菓子作りにも徐々に興味を持ち始めます。

「最初の頃は、和菓子作りに興味がなく、でも、スーパーやコンビニなどが展開し始めると、個人の卸業は下火になってきて、自分には何ができるか、祖父が父へ残した味はどんなものなのだろうかと考えたときに和菓子を作ってみようかなと思いはじめたんです。父からはよく『菓子作りは言ってもわからないから見ていろ。見ていけばわかる』なんて言われたものです」と振り返る大房さん。父の背中だけでなく、積極的に研修会などにも参加したほか、

独学で洋菓子作りも学びます。その努力が、のちに「地元銘菓」となる和菓子の発案にも繋がりました。

「今は和菓子を中心ですが、洋菓子も作ります。商品ケースにはありませんが、事前にご注文いただければホールケーキなども対応しています」と笑顔を見せます。

受け継がれる地元銘菓

昭和51年、室根神社に釣鐘(大梵鐘)が落成されると、2代目の父が大梵鐘に見立てた型を作り、ごまや抹茶など当時としては珍しい餡を挟んだ「つりがね最中」を考案。当時、同店は卸業が中心だったため、「つりがね最中」は村内の菓子店に卸しての販売(昭和52年)でしたが、平成7年頃に店舗を構えてからは、同店の看板商品となりました。

「お菓子とうふ」は平成7年頃に誕生。菓子を製造する過程で余ってしまう卵白の活用という「課題から



- 1 朝日堂製菓3代目の大房厚治さん。
- 2 店内には数種類の和洋菓子。
- 3 朝日堂製菓の店舗外観。

DATA
〒029-1201
一関市室根町折壁1-6-3
TEL & FAX 0191-64-3029

生まれた商品」だとい、添加物を一切使用せず、豆乳を使用することで、もっちりしっとり柔らかいカステラに仕上がり、その色合いがまるで豆腐のようだったことから命名したのだとか。両商品は、第23回全国菓子大博覧会に出展し、見事、全国菓子大博覧会会長賞(つりがね最中)と栄誉金賞(お菓子とうふ)を受賞。大房さんは「何よりも『室根村のお菓子』だということを全国に知ってもらえる機会となったことが嬉しかった」と当時を振り返ります。

今の一押しは3年の試行錯誤を経て商品化したという「ふわどら」。小さなお子さんから高齢者まで楽しめる和菓子で、令和7年開催予定の第28回全国菓子大博覧会への出展にも意欲的。長男も4代目として修業中で、繋いできた和菓子作りの技術、そして「室根村の銘菓」を、次の世代に受け継いでいきます。

※1 平成10年、岩手県滝沢市の会場で開催。主催は、全国菓子工業組合連合会。
※2 受賞を機に全国で「お菓子とうふ」の類似品が増え、商標登録を済ませた業者もいる。

今月のテーマ

地域運営の落とし穴④
地域協働体はRMOなの？



「組織」ではなく「機能」で考える

これだけは、声を大にして言いたい……！「地域協働体は、RMOです！」

一関市では、合併を契機に「協働のまちづくり」を施策に掲げました。新市としてのまちづくり施策ですが、その背景には、見えない課題、課題の難解化かつ複雑化に少しでも対応していかなければ……という課題感があり、「地域協働体」の設立に至ります。「地域協働体」は、行政区や自治会の人口格差が広がっていることもあり、市民センター(旧公民館)単位で一定量の人口を確保し、地域づくりを進めていく「広域の地域づくりシステム」の手法です。

一関市が地域協働体の設立を始めた頃、国も、従来の行政主導の地域づくりから、小学校区や公民館単位の地域づくりへシフトチェンジし始めます。ここで提唱されるのが「地域運営組織(Region Management Organization)」であり、通称「RMO」です。Region(リージョン：地域) Management(マネジメント：管理) Organization(オーガナイゼーション：組織)は、直訳すると「地域を管理する組織」であり、ここで言う「地域」は、小学校区もしくは公民館単位のような「広域の地域」です。

一関市では「地域協働体」という呼称ですが、全国的には「地域運営組織」という呼称になるのです。全国的にRMOの取り組みは広がり、令和5年度の総務省の調査では、全国で7,710団体あると報告されています。それだけ一つの集落規模の縮小が課題となり、広域での取り組みが受け入れられているということと受け止めます。

さらに、農林水産省が農村集落の少子高齢化を背景に、集落の維持や生活支援のための「農村RMO」という提案をし始め(本誌2023年3月号「地域運営の落とし穴② 『農村RMO』の出現」参照)、従来のRMOは、「一般RMO」と呼ばれるなど、区別されるようになったのです。この時点でややこしいですね。

地域運営組織による地域づくり事業が積極的に行われるようになったものの、農村集落における景観維持や生活支援に関する課題の優先度が高まったため、農村集落に地域運営組織の手法を取り入れようとした背景なのでしょうか(推測です)。

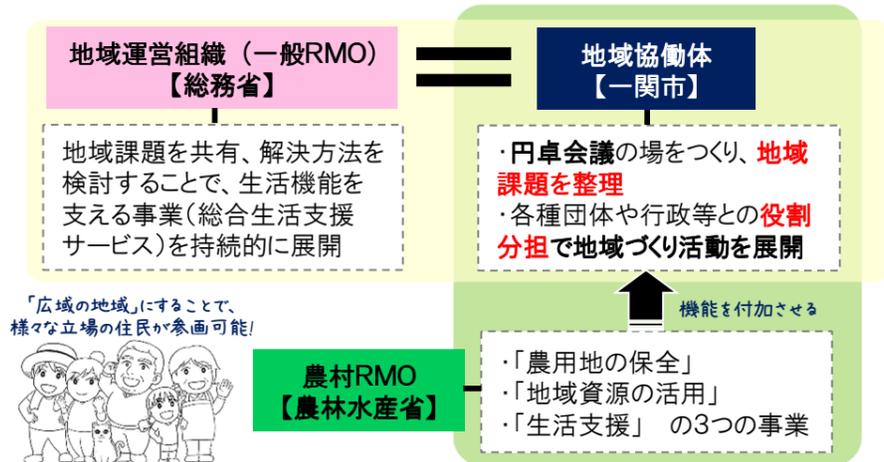
一関市では、地域協働体という地域運営組織を設立し、地域ごとの課題やニーズに合わせた取り組みをしており、農村集落の維持や生活支援に関することも網羅されているため、農村RMOを特別視することはなかったのですが、農村RMO設立の気配がざわつき始めて……。

しかし、農村RMOと地域協働体は、同じものだと説明をしても、なかなか理解され難く、そもそも地域協働体の理解もいま一つのところに、農村RMOの説明をかぶせてしまう状況になり、RMOという言葉そのものがストレートに使われる農村RMOのことを、RMOと言われるようになってしまいました。我々からしたら違和感でしかありません。RMOは地域運営組織(=地域協働体)、農村版の地域運営組織が農村RMOだからです。でも、市民からしたら新しい専門用語が出てきただけで、何が、どう違うのかなど気にすることではないでしょう。制度の縦割りの悪い部分が露呈してしまい、現場や住民を混乱させる状態を作ってしまった。

一関市民のみなさんに言いたい！

一関市に33団体設立されている地域協働体は、一般RMOと農村RMOの両方の機能を兼ね備えているのです。つまり、農村RMOと同じ枠組みの「地域協働体」という組織を設立しているのですから、農村RMOを改めて設立する必要はなく、地域協働体という母体に、「農村RMOの機能」を付加させていけば良いだけのことなんです……！

※本誌2023年5月号「地域運営の落とし穴④ 農村RMOと地域協働体」もご参照ください。



地域の「気になること」をセンタースタッフが独自に調査!

ミッション 86

暮らし調査 ファイルNo.25 「照井堰用水」

前号では、一関の地名由来の1つである「堰」について調査しました。「堰」の指すものとして、当センターとしては「北上川の氾濫をせき止めるための堰」が有力であるという結論にしたものの、調査過程で深掘りしてしまった「用水堰」について、当地域事情を整理しました。今回はさらにその派生で、当地域で最も古い歴史を持つとされる「照井堰」について調査し、用水路開削が急務だった時代の暮らしにも、思いを馳せてみました。
※記載内容はあくまでも当センター独自調査の結果です。

800年以上の歴史

当地域において最も古いとされる堰は「照井堰」と言われ、今から約840年前の1185年(文治1年)に開削とされています(伝説的要素あり)。実は、平泉文化・浄土思想に基づく4寺院の池(毛越寺浄土庭園大泉ヶ池、常行堂後方にある弁天池、観自在王院舞鶴ヶ池、無量光院梵字ヶ池)に水を満たすための導水路が、照井堰用水開削に発展したと言われ、その導水路は平泉遺跡群発掘調査において確認されています。

奥州藤原氏時代の水田は、小規模河川や沢など「自然の水源」を利用した取水が主。奥州藤原時代の平泉の人口は約10万人と京都に次ぐ人口だったとされ、水田開発が急務だったことが窺えます。

しかし、自然の水源による取水では、開墾可能な土地には制限があります。「照井土地改良区」発行の文献によると、水不足による農民たちの窮地を救うために立ち上がったのが藤原秀衡の家臣である照井太郎高春でした。高春は、水の豊富な磐井川から水を引こうと考えますが、磐井川の河床が平野部よりも深く下刻し低い状況から、河川の上流部から取水する仕組みをつくる必要が。

高春は磐井川を丹念に調べて歩き、堰の道筋を決めると、企画から

27年後の1185年、開削に着手。しかし、1189年(文治5年)、藤原氏の滅亡により、高春は難を避け志半ばで五串村に移ります(以後、葛西氏に仕えた)。

1208年(承元2年)、高春の子孫である照井太郎高泰と荻荘荘司が私費を投じて五串村・猪岡村地内の磐井川に穴堰(非水路トンネル)を開削。その後も、大崎掃部左衛門、柏原清左衛門、柏原新十郎、千葉半右衛門等、様々な人物や統治者たちの手によって造設(延長)や改修などが重ねられ、1600年代には中里村や平泉地内まで灌漑するなど、当地域の水田開発を支えてきました。

明治維新後、堰の管理は県に属しますが、明治41年以降は水利組合や土地改良区(複数の合併歴あり)の管理となり、平成28年11月には「照井堰用水(照井堰から分水された用水堰の水路体系)」として「世界かんがい施設遺産」に登録されました。

水路＝豪族たちの夢?

高春は農民の窮地を救った英雄として語られますが、時代背景で見ると、水田開発が盛んに行われた時期です。743年の墾田永年私財法を機に、貴族や寺社、有力な豪族などが、農民を使って大規模な水田開発を行っており、後の荘園に発展します。

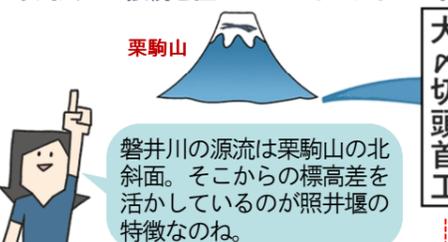
東日本の水田開発は幕末期が最隆盛期とされていますが、骨寺村が中尊寺経蔵別当領となった(1126年のこと。高春も様々な意思のもと、奥州平泉文化を築いた各種技術を活用し、水田開発を進めたのかもしれない)。

照井堰用水の歴史や特徴をまとめてみた

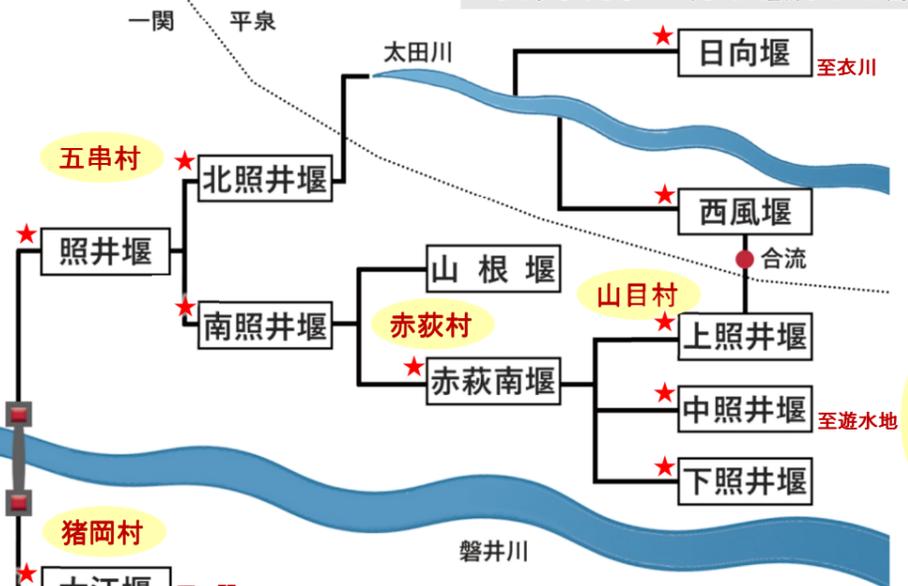
「照井堰」は、長い年月をかけて、「北照井堰」「南照井堰」など、複数の堰に分水されており、「世界かんがい施設遺産」にはそうした堰も含めた水路体系が「照井堰用水」として登録されています。なお「照井堰」と同時に穴堰を開削し、照井堰とともに「大切頭首工」から取水している「大江堰」は、「世界かんがい施設遺産」には含まれていませんが、照井土地改良区では照井堰と同様に管理しています。

★：元禄12年(1699)の『磐井郡西岩井絵図(写)』で確認できた堰(当時は現在の名称ではない)。つまり少なくとも1699年までに灌漑していた堰。

照井太郎高春の死後、巖美溪から約3km上流の磐井川両岸に「穴堰」を開削したのは高春の子孫・高泰と荻荘荘司。照井太郎高春が生前にどこから開削したのかは不明ですが、照井土地改良区によると、下流側から掘削(雨などが降った時に水が抜けやすいように)し、最終段階で取水河川と接続したのではないかとのこと。高春が下流から上流に向かって掘削を進め、高泰が取水河川との接続を担ったのかもしれない。



照井堰用水の全長(各水路の長さの合計)は60kmで、代掻き期には1秒間に4tもの水が流れるんだって!



堰の変遷 (土水路・石積み・コンクリート)

開削当初は土水路だった堰も、昭和20~30年にはその多くが石積みで改修されました。コンクリート水路への改修が進められたのは昭和50年代以降のことです(照井堰用水では)。

土水路の水路幅はコンクリート水路に比べて大きく(写真①②参照)、コンクリート水路になることで水路幅が狭くなり、水流も早くなりました。水路の深さは、現在と同じくらいで、水路幅よりは短いのが通常だとか。

近年は、魚道の整備や蛍の生息地など、住民の要望等を聞きながら、コンクリートづくりから石積みづくりに戻すところもあり、生態系を壊さない努力がされています。

ちなみに、大正時代から昭和にかけては、堰に流れる水を利用した水車が照井堰用水でも30台近く稼働し、精米や粉ひき等を行っていたほか、赤荻字豊料地内では水力発電も行われていたのだとか(明治44年稼働の山十製糸工場が動力電源を確保するため、敗戦直前まで稼働)。

用水堰を作った道具たち

磐井川の岸は固い岩。掘削には相当の苦労があったことでしょう。当時使用していた主な道具は、鑿(たがね)、玄能(げんのう)。これらの道具で岩盤を掘り、「もっこ」で土や石を運びました。1日2m掘削するのがやっとだった、とか……。



<参考文献> 照井土地改良区(2012)『幾星霜』/水土里ネット(2017)『照井堰用水の概要』/一関市(1978)『一関市史 第1巻 通説』/ 他 ※掲載しきれなかった参考文献等は当センターホームページに記載しています。ご了承ください。